

# 東京 2020 に向けた夏季オリンピックの 医学サポート

赤間高雄\*<sup>1,2</sup>

## ●1. 夏季オリンピックの日本代表選手団の医学サポート

### (1) メディカルチェック

夏季オリンピックのメディカルチェックは、大会開催年の2月ころから7月まで、日本代表選手とその候補選手を対象として、国立スポーツ科学センターで実施される。内科、整形外科、および歯科で、問診、診察、検査が行われ、結果はプロブレムリストにまとめられ、プロブレムごとに、Active, Follow, Inactive のいずれかに評価され、Active なプロブレムに対しては治療などの対処がとられる。

2004年アテネ大会、2008年北京大会、および2012年ロンドン大会の派遣前メディカルチェックにおけるActiveプロブレムの判定率を比較すると、内科と歯科では減少しているが、整形外科のActiveプロブレムを持つ選手は増加している(図1)<sup>1-3)</sup>。内科と歯科のプロブレムはスポーツ活動を継続しながらでも治療すれば治癒あるいはコントロールできる場合が多い。しかし、整形外科的プロブレムはスポーツ活動自体が原因になっていることが多く、競技レベルの高いオリンピック代表選手においてはActiveなプロブレムを減少させることが難しいことを示している。ただし、整形外科のActiveプロブレムは適切に対処しながら競技パフォーマンスを発揮できるものもあるので、質的な評価が必要である。

### (2) 帯同メディカルスタッフ数とハイパフォーマンスサポート・センター

日本選手団は、各競技の代表チームが集合して構成される。メディカルスタッフは各競技から推薦されて競技に帯同するドクターやトレーナーと、選手団本部として派遣されるドクターとトレーナーがいる。全ての競技がドクターとトレーナーを帯同するわけではないので、選手団本部のドクターとトレーナーは、メディカルスタッフを帯同しない競技のサポートや国際オリンピック委員会 (IOC) との調整などを担う。オリンピックでは Accreditation card (AD カード) によるアクセス制限が厳しいので、選手村、試合会場、および公式練習会場で選手をサポートするにはアクセス権限のある AD カードを保有する必要がある。しかし、選手団スタッフの AD カード数は選手数の 55% までに制限されている。ロンドンオリンピック日本代表選手の現地サポートにあたったトレーナーのうち AD カードを保有していた者は 1/3 にすぎないと報告されている(表1)<sup>4)</sup>。AD カードをもたない競技スタッフが選手のサポートにあたる場所(選手村外サポート拠点)として、ロンドン大会でマルチサポート・ハウス、リオ大会ではハイパフォーマンスサポート・センターが設置された。選手村外サポート拠点に派遣されたメディカルスタッフは1日入場証で選手村に入って日本選手団医務室でケアを行い、AD カードを持つ本部メディカルスタッフはその間に各競技会場に帯同して選手サポートにあたるというサポートも行われた。

### (3) ホスト国の選手村利用

2020年東京大会ではホスト国としての選手村利用方法を検討する必要がある。ホスト国選手団

\*1 早稲田大学スポーツ科学学術院

\*2 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会メディカルディレクター

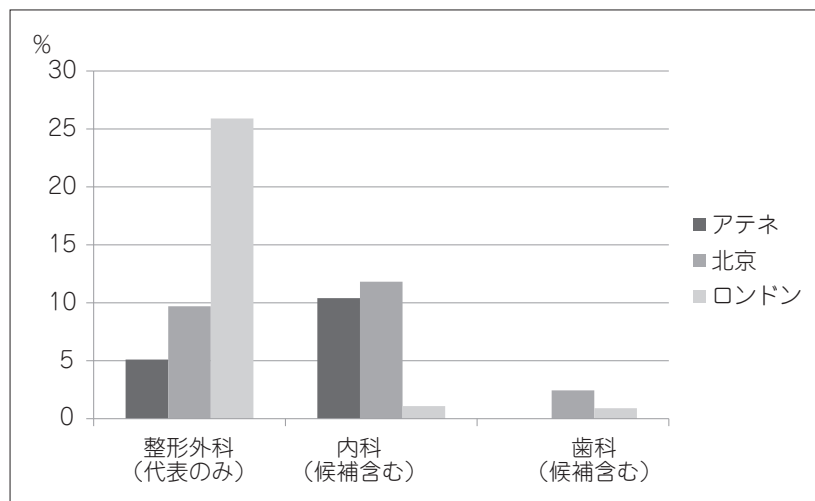


図1 過去の3大会の派遣前メディカルチェックのActiveプロブレム率 (文献1) 2) 3) から作成)

表1 ロンドンオリンピック日本代表選手団の現地サポートを行ったトレーナー (文献4) から作成)

競技	ADカード有	ADカード無
本部	2	0
マルチサポートハウス	0	8
各競技	23	41
合計	25	49

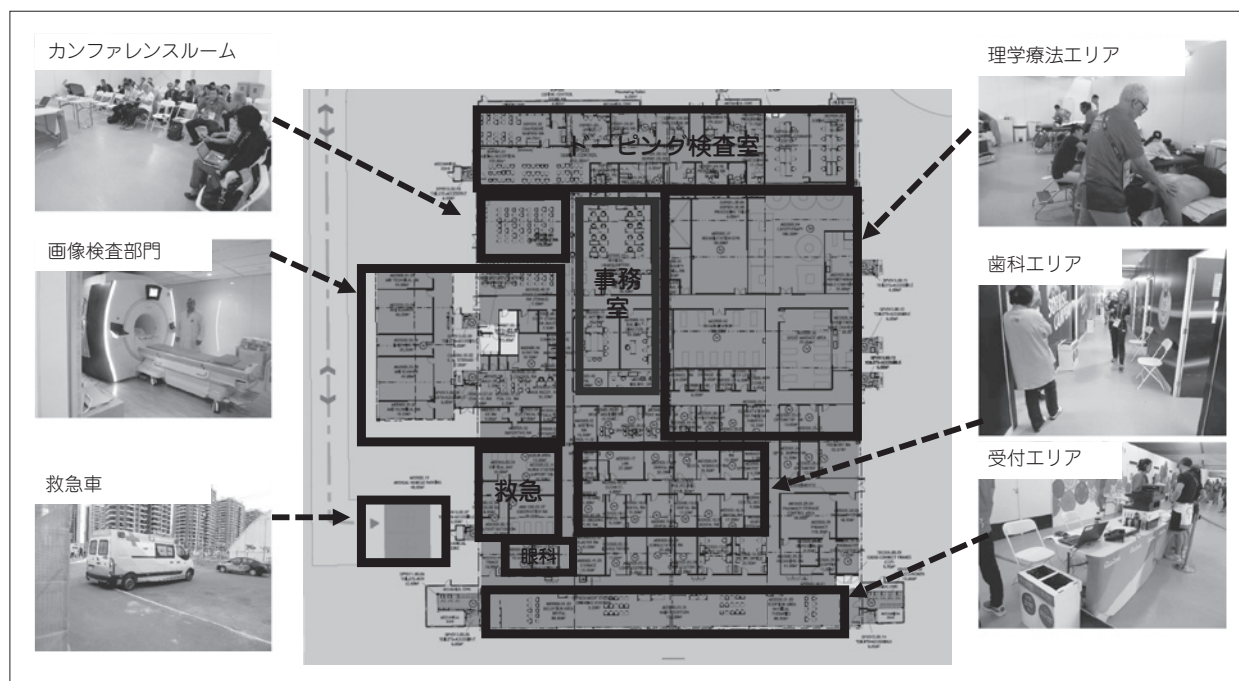


図2 リオ大会の選手村ポリクリニック

は選手村で各国選手団と交流する役割もあるが、夫できる利点を生かさなければならない。コンディショニングに有効な選手村利用方法を工

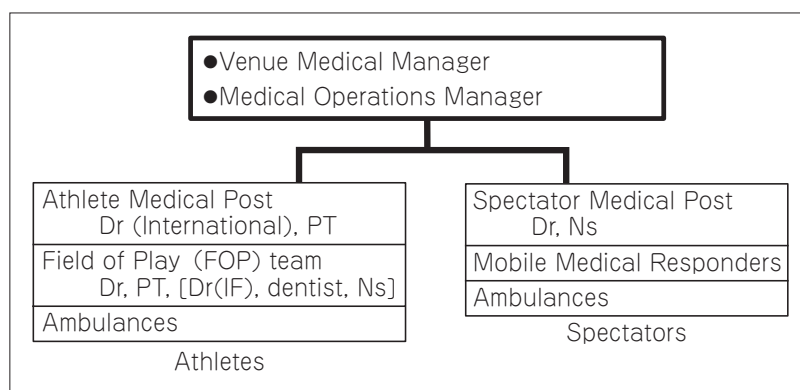


図3 リオ大会の各競技会場における医務体制

## ●2. 2020年ホスト国としての医学サポート

大会関連施設内の医務体制は、IOCの指導監督のもと、大会組織委員会が整備運営する。開催都市には多くの観客や観光客が集中するので、行政は mass gathering に対する体制が求められる。

### (1) 選手村ポリクリニック

選手村ポリクリニックは、市中の医療機関とは異なり、理学療法部門と歯科診療の受診者が大部分を占める。また、選手団が持参できない画像検査機器（MRI など）も重要である（図2）。

### (2) 会場医務体制

競技会場の医務体制は、選手用と観客用とを

別々に整備する必要がある（図3）。会場からの救急搬送については、選手は大会公式病院、観客は地域の救急対応病院に搬送することになる。

## 文 献

- 1) 第28回オリンピック競技大会(アテネ)日本代表選手団報告書, 日本オリンピック委員会, 2005.
- 2) 第29回オリンピック競技大会(北京)日本代表選手団報告書, 日本オリンピック委員会, 2009.
- 3) 第30回オリンピック競技大会(ロンドン)日本代表選手団報告書, 日本オリンピック委員会, 2013.
- 4) 板倉尚子: 日本選手団のメディカルサポート—トレーナーの立場から—. 臨床スポーツ医学 29(12): 1249-1251, 2012.